

サウンドデザイン演習（女子美術大学）

【解説】ミニマル・ミュージックについて

～ 反復音楽、または『緩やかな変化の過程』の作品化としての音楽

石井 拓洋

takuyo.lshii@gmail.com

2019

ミニマル・ミュージック

minimal music

- 旋律やリズムの点で短く単純な素材を用いて、それを複数のパートで反復して演奏することで、演奏時に素材間に生ずるズレによって、作者が事前に想定しない音楽的效果を期待する音楽スタイル。この傾向はスティーブ・ライヒ (1936 -) に顕著。
- ラ・モンテ・ヤング (1935-) が「概念上の父」とされる (松平頼暁、p.182)。60年代初頭、ヴェーベルン作品における反復、13Cヨーロッパ中世音楽、アジアの民族音楽、カウンターカルチャーなどの影響から想起。ヤング《弦楽三重奏》(The Trio for Strings , 1958, UCLAで作曲) がミニマル・ミュージックの端緒との説がある (小沼 p.21-22)。
- 1960年代半ば頃のアメリカにはじまり、70年代にアメリカで隆盛し、80年代以降は全世界の多様な音楽文化に影響をあたえた。
- ミニマル・ミュージックの名は、美術の同時期の運動「ミニマル・アート」(フランク・ステラ、ドナルド・ジャットなど) の比喩として名付けられたもの。ただし、スタイル上での具体的・直接的な関連はない (松平、同前)。
- スティーブ・ライヒは、コンセプチュアルアートの美術家 ソル・ルウィット (1928-2007, 米) と親交が深い。このことは、ミニマル・ミュージックの思弁的性格を示している。

資料：アルス・アンティークワ

(本講義「中世の音楽」より)

13世紀のフランスでの、自由オルガヌムによる音楽。
ノートルダム楽派のペロタン、レオナンが有名
グレゴリオ聖歌に対して、自由に動く対旋律を付けられる
ようになった。5度の完全協和音の響きが特徴。
この時期は、フランスが音楽的に最もすすんでいた。

- 代表的な作曲家（ノートルダム楽派・フランス）
ペロティヌス（ペロタン）（1100頃～1200頃, 仏）
レオニヌス（レオナン）（1100頃～1200頃, 仏）



《Sederunt principes》 CD: “Léonin & Pérotin: Sacred Music from Notre-Dame”より



《Clausulae & motet on _Dominus-II》CD: “Léonin & Pérotin: Sacred Music from Notre-Dame”より

ミニマル・ミュージックの代表的な藝術家 4人

- ラ・モンテ・ヤング (La Monte Young, 1935-)
「ミニマル・ミュージック」の「概念上の父」。持続音（ドローン）が特徴
- テリー・ライリー (Terry Riley, 1935-)
代表作：《A Rainbow In Curved Air》
- スティーブ・ライヒ (Steve Reich, 1936-)
代表作：《ピアノ・フェイス》, 《ドラミング》
- フィリップ・グラス (Philip Glass, 1937-)
代表作：《浜辺のアインシュタイン》

西洋藝術上での位置付け、意義

- ・ 西欧近代音楽における、イントロ - クライマックス - エンディング (緩-急-穏) の時間構成とは別次元の発想。非構造的、非建築的。静的 (static) な性格。
- ・ 西欧近代とは異質な音楽的前提。前近代としての13C西欧中世音楽、非西欧圏の音文化 (インド、アフリカ、インドネシア-ガムランなど) からの影響。進歩主義への批判。1960年代のカウンターカルチャーの影響も。
- ・ 「ミニマル」というよりも、多パートでの演奏による素材「反復とズレ」に着目した音楽であり、そこから作家の意図を超える「緩やかな変化の過程」(“Music as a Gradual Process”, ライヒのエッセイ, 1968) を作品の全てとする新たな考えがある。主体への再考としての現代藝術的意義。
- ・ 制作の結果ではなくて、〈制作の過程〉を作品とする新たな考え。「ミニマル・アート」というよりも、むしろ「コンセプチュアル・アート」との近接性 (ソル・ルウィットとライヒ) を考えたい。
- ・ 作品それ自体が「自律」することを期待する、西欧近代的な複雑な音楽スタイルではなく、むしろ「反復とズレ」という単純な音楽現象を題材として、そこから音楽的はたらきかけが「作品 - 聴き手」、「演奏家 - 聴き手」という関係性の中で生じてくるもの。
コンセプトにおける、「実体から関係へ」の点において、脱近代的、つまり現代的。

西洋藝術上での位置付け、意義

- 「ミニマル・ミュージック」は、現代音楽の一つとして、西洋音楽史において認知されたスタイル。
- とはいえ、実際の現代音楽の作曲界でこのスタイルを実践し作曲家として認知されるのは難しい。とくに日本では、専門的作曲の登竜門の場において、ほとんど無視されているため。また、このスタイルで音大作曲科で卒業作品を書いて卒業するのも困難。アカデミックでは閉ざされたスタイル。
- なぜ上記のような場で「無視されるか」は不明だが、このような点にむしろ、「藝術と社会」を考える上での重要な論点が含まれると考えられる。

参考資料・自習のために

- ・ 松平頼暁『現代音楽のパスージュ-20・5世紀の音楽_増補版』、1995年、青土社。
 - ・ 小沼純一『ミニマル・ミュージック:その展開と思想』1997年、青土社。
 - ・ 篠田大基「ミニマル・ミュージックとコンセプチュアリズムの展開:スティーブ・ライヒとソル・ウィット、その先行作家たちとの比較を通じて」、雑誌『哲学』(第132号)、2014年、三田哲學會、343~366頁。
 - ・ ウィム・メルテン『アメリカンミニマル★ミュージック』細川周平訳、1985年、冬樹社。
- ※ web 上で読める辞書類には、ミニマルミュージックの適切な資料はほとんど見当たらない。とくにWikipediaをはじめ、web検索すると散見される解説、「音の動きを最小限に抑え」のような表面的スタイルのくだりだけを過大視し、だから「ミニマル」であるとわかりやすく認識してしまうにとどまると、その本来の奥行きを取りこぼすことになると考えられる。ミニマル・ミュージックの強い西欧近代批判からの思弁的性格を無視してはいけない。